

四日市港の機能強化と港町としての
新たなまちづくりに向けて

【提 言】

平成30年 月 日

四日市商工会議所

1. 四日市港の過去から現在

四日市港は、古くから街の拠点として、人々の生活や経済を支え、歴史や文化を育成し、産業や物流、人々の交流といった活動の場として、内陸部と密接な関係を持って地域の発展に大きな役割を果たしてきた。

幕末から明治初期にかけ旅客の往来や物資の輸送が盛んとなり、明治32年8月の開港以来、主に羊毛、綿花の輸入港として栄えてきた。昭和30年代前半に大規模な石油化学コンビナートが誕生すると、工業港としての性格を強め、産業構造の変化、貨物のコンテナ化、企業活動のグローバル化の進展等に対応しながら、中部圏を代表する国際物流拠点として、原油やLNG、石炭の他、完成自動車やコンテナ貨物を取り扱う国際総合港湾として成長を続けている。

2. 四日市港を取り巻く環境の変化

平成20年のリーマン・ショック、そして平成23年3月に起きた東日本大震災は国内経済に大きな影響を与え、これらを契機に円高の進行、生産拠点の分散化、電力供給源の変化（原子力発電の縮小）、製造業企業の海外進出が進むこととなった。

一方、二年後に東京五輪を控え、円安やビザ緩和等を背景に訪日外国人観光客が急増しており、その要因の一つとして外国クルーズ船の日本寄港も大幅に増加している。

こうしたことから、四日市港を取り巻く環境（下記参照）も変化しており、今後その対応が求められている。

- ①アジア経済の発展や企業の国際分業の進展
- ②アジア諸国の大規模な港湾開発
- ③コンテナ船、バルク貨物船、自動車船の大型化
- ④南海トラフ地震等の大規模地震災害への対策
- ⑤外国クルーズ船の寄港を契機とした交流人口の増大

3. 現状から見た四日市港の果たすべき役割

(1) 多様なモノづくり産業を物流面で支援

四日市港は、コンテナ貨物やバルク貨物、完成自動車を扱う総合港湾であり、今後も引き続き背後に広がるモノづくり産業の成長、発展に向けた国際競争力の強化を物流面で支える必要がある。

(2) 街の安全・安心を支える

南海トラフ地震の30年以内の発生確率が70%～80%程度と言われるなか、大規模地震等から地域住民や企業を守るとともに、被災後の住民生活や企業活動の復旧・復興に向けたソフト、ハード面における対策を引き続き強化する必要がある。

(3) 港町としての魅力的な都市機能（都市空間）の提供

近年、工業港として発展してきた四日市港にも国内外のクルーズ船が継続的に寄港するなか、大勢の観光客や県民・市民が交流、集える都市空間として、また人々が行き交う世界に通じるゲートウェイとしての役割りを担う必要がある。

4. 環境の変化と果たすべき役割から見た四日市港の課題

今後、四日市港が世界経済や企業戦略の変動、自然災害への対応、産業活動や観光面の交流活動の活発化などに対応していくためには、次のような課題があると考えられる。

▽コンテナ貨物、バルク貨物増加等に対応するための物流用地の不足

▽世界的に進展する貨物船やクルーズ船の大型化への対応

▽南海トラフ等大規模地震発生時の物流機能の確保

▽港湾施設の老朽化による施設機能の低下（四日市地区）

▽物流と人的交流の分離

5. 〔提言〕四日市港の機能強化と港町としての新たなまちづくりに向けて

これまでのことを踏まえ、四日市港が将来に向けて更なる発展を目指すには、物流機能の強化に向けた新たな用地を開発し、物流施設の整備を進めるとともに、老朽化した港湾施設の改修や更新、用途を変えた港湾施設の有効活用に取り組みなければならない。

四日市商工会議所は、四日市港の発展、港町としての発展に向け、以下を提言する。

(※取り組みの目安⇒短期：1～5年程度先／中期：5～10年程度先／長期：10年以上先)

《四日市港の機能強化》

四日市港の貨物取扱量は、ここ数年6,200万トン前後で安定的に推移しており、平成29年の外貨コンテナ貨物の取扱量は過去最高の196,950TEUを記録した。また、今後は既存の貨物取扱量の増加やエネルギー原料となる新たな貨物の取扱需要も見

込まれている。一方で、南海トラフ等大規模地震の発生が懸念されており、物流面、防災面に関して、次のような取り組みを進めることが望まれる。

【中期】

(1) 霞ヶ浦北埠頭の延伸によるコンテナ取扱機能の強化と物流用地の拡充

(2) 霞ヶ浦北埠頭の耐震強化岸壁の供用開始

《港町としての新たなまちづくり》

平成12年頃から四日市港には継続して国内クルーズ船が寄港しており、今年1月には四日市港として初めてとなる大型外国クルーズ船が寄港、今後も国内外のクルーズ船が継続して寄港するものと思われる。

こうしたクルーズ船の寄港により、何千人もの観光客が四日市港を訪れ、また何千人もの県民・市民がクルーズ船を一目見ようと港を訪れており、四日市港は人々が集い、行き交う空間としても活用されている。

一方で、親水空間や交流空間としての活用が期待されていた四日市港の四日市地区は施設の老朽化が進み、使用制限や使用停止等の措置が講じられている。

こうした状況のもと、物流機能の中心は霞ヶ浦地区へ移転しており、四日市市が全国有数の産業都市へと発展する拠点となった四日市地区は、かつての活気はなく、将来に向けた同地区の活用が全く見えない状況にある。

今後、四日市市が港を活かした“港町”として魅力的な都市機能を提供するためには、四日市地区の再生が必要不可欠であり、次のような取り組みを進めることが望まれる。

【短期】

(1) 街づくりと一体となった四日市地区再生プランの作成

(港湾行政と都市計画行政の連携による港町づくり)

(2) 四日市地区におけるクルーズ船への受け入れに向けた施設整備

※四日市地区＝四日市港四日市地区

【中期】

- (1) 四日市地区内への集客施設の誘致と千歳運河や末広橋梁、潮吹き防波堤等の産業遺産を活用した港町づくりへの取り組み

【長期】

- (1) 使用制限や使用停止等の措置が講じられているエリアの再開発
- (2) JR 四日市駅東側と四日市地区との歩行者アクセスの確保

来年で開港120周年を迎える四日市港。この機会を起点に、四日市市が港町であることを再認識し、四日市港が地域経済を支え、住民生活に憩いと豊かさをもたらす港として更なる発展を遂げることを期待する。

以上